

明和大津波(めいわおおつなみ)

【概要】

西暦1771年4月24日（明和8年<乾隆36年>3月10日）午前8時ごろ、現在の沖縄県先島諸島のうち八重山諸島および宮古諸島を中心として大地震の揺れに見舞われ、直後に津波が来襲しました。近世琉球と呼ばれる時代のことです。この津波による犠牲者数は1万人を超え、日本（琉球）史上でも、有数の津波被害でした。現在、明和大津波、八重山地震津波と呼ばれる大災害の発生です。

古文書記録によれば、大きな地震の後、大波が3度も寄せあがったと記録されます。石垣島を中心として、宮古諸島でも多くの被害者を出し、死者だけでも計12,000人にもものぼりました。

そのうち、古文書の『大波之時各村之形行書』によれば、八重山諸島における死者数は、9,313人。津波前の人口が28,992人とあることから、全体の30%以上の人々が命を失ったこととなります。ただし、この死者数は、史料によって若干の違いが見られます。これは、いったん報告がなされた後に、生存者を確認した例や、馬艦船の水夫や罪人の数が含まれる例とそうでない例があるためとされています。

そのうち、最も被害が大きかったのは、石垣島の南東にあった集落で、真栄里、大浜、宮良、白保といった地域です。この4つの集落だけで、およそ4,800人も死者を出しました。特に、白保村は、約98%の人々が命を失いました。

【遡上高の研究】

先出の『大波之時各村之形行書』には、「白保と宮良の境界にある嘉崎という浜から揚がった津波は、28丈2尺（約85m）もあった」と記されます。これを根拠に、明和大津波の遡上高は、85mであったと言われてきました。しかし、現在、科学的な検証や、GPSなど位置情報を利用した検証が進められ、高いところ（宮良地区）でも30mほどであることが分かっています。各村の遡上高を知る手がかりとして、家にまつわる伝承などが数多く残されています。

【国指定になった津波石】

石垣島にある津波石5個が、国指定の天然記念物になっています。これは、津波石という過去の災害の痕跡を保護し、未来へと伝えることで、悲惨な記憶を風化させないという目的もあります。また、防災教育にも活用されることが期待されています。

国指定になったのは、明和大津波に関係する古文書「奇妙変異記」に記された、高こるせ石（とふりやの高こるせ石）、あまたりや潮荒、安良大かね、科学的検証から、明和大津波で打ちあがったことが科学年代測定によって判明し、世界最大のハマサンゴの津波石に認定されたバリ石、そして、約2,000年前の津波によって打ちあがった津波大石の5つです。